

第15回

モンゴル帝国

監修・講師
上田 信

学習のねらい

13世紀から14世紀半ばにかけて、ユーラシア大陸の大半を勢力下に置いた大帝国が存在した。モンゴル高原東北部のモンゴル部族出身のチンギス・ハンがつくり上げたモンゴル帝国である。なぜ大帝国が成立したのか、その理由を遊牧というモンゴル部族の生業、帝国が重視した交易などの面から探る。チンギス・ハンの孫フビライは、国名を中国風に「元」とし、モンゴル高原や中国を支配するとともに、海の交易ルートも支配下に置こうとした。

・ <モンゴル帝国の成立>

モンゴル高原 クリルタイ ハン 千戸制 元

・ <陸と海をめぐる交易>

駅伝制 (ジャムチ) 大運河改修 商業税 交鈔

・ <帝国の遺産>

ティムール帝国 ムガル帝国

■ ■ ■ モンゴル帝国の成立 ■ ■ ■

13世紀、ユーラシア大陸をまたぐように出現した「モンゴル帝国」が、東西の世界を結ぶ交易路の安定をもたらした結果、経済や文化の交流が盛んとなり、その後の世界に大きな影響を与えることになった。

12世紀後半、帝国の創建者テムジン（チンギス・ハン）は、部族の枠を越えて遊牧民を統合し、1206年に遊牧民を束ねる君主、ハンの称号を得て、チンギス・ハンと名乗る。それまで部族ごとに編成されていた組織を、社会・軍事的な組織「千戸」（1,000人の戦士を出す集団）に再編し、強大な騎馬軍団を組織した。また有能な人材は、出身民族や宗教を問わず採用した。

チンギス・ハンは東へ西へと遠征し支配を広げた。その死後も一族による領土拡大路線は引き継がれた。13世紀後半、孫フビライは王朝「元」を建て、中国全土の支配を成し遂げ、大ハンとしてチンギス・ハンの子孫が統治する諸国をゆるやかに統合した。

■■ 陸と海をめぐる交易 ■■

モンゴル帝国のもとで東西を結ぶ交易路の安全が確保されると、人や物が盛んに往来するようになった。**駅伝制**（ジャムチ）が整えられ、交易ルートに駅が設けられると、通行許可証を持つ公人には食事や馬が提供され、情報もすみやかに伝えられた。商人たちは通行税を免除され、物資が運ばれた先で商業税を納めた。このシステムは塩の専売制とともに元朝の財政の基礎となった。

13世紀後半フビライは、南宋を滅ぼして海上貿易で繁栄していた都市を版図に加え、「海の道」の交易にも乗り出す。**大運河**を再整備して、新たな運河を建設し、豊富な穀物や物産を産出する江南地域と首都大都（現在の北京）を結んだ。

ユーラシアをめぐる交易は、どの地域でも通用する銀を通貨として取引されたが、元朝のもとでは補助的な通貨として「**交鈔**」^{こうしやう}と呼ばれる紙幣が発行された。

■■ 帝国の遺産 ■■

フビライの死後、帝位をめぐる争いがつづき、元の政治は混乱する。財政難の打開策として交鈔が乱発され、経済も混乱するようになった。14世紀中ごろから各地で反乱が起き、江南と首都大都とを結ぶ大運河と海路が機能しなくなった。江南で成立した漢民族の王朝・明の軍勢が迫ってくると、元朝の皇室はモンゴル高原に引き上げた。

西方ではチンギス・ハンの子孫が支配するチャガタイ・ハン国が分裂。混乱していた中央アジアは、モンゴル帝国の再興を目指す軍人**ティムール**によって統一された。その首都サマルカンドは、繁栄を極めた。

15世紀末、そのティムールの子孫として、モンゴルの血を継ぐバーブルが、現在のアフガニスタンに進出、**ムガル帝国**を建国する。この帝国はのちに、インドのほぼ全域を支配する。

モンゴル帝国の時代に人と物の往来が盛んとなった「海の道」には、16世紀になるとヨーロッパ人が乗り出してくる。モンゴル帝国が結びつけた東西交流は、次の時代に受け継がれていくことになる。

考えてみよう 調べてみよう

- 遊牧という生活について、衣食住や家族のあり方などを調べてみよう。
- チンギス・ハンがなぜ大帝国の基盤を築くことができたのか、考えてみよう。
- マルコ・ポーロがたどった旅について、『東方見聞録（世界の記述）』を読み、そのルートや各地での出会いなどを確認してみよう。